

秋家秘傳玉の鍵

中村俊定文庫

文庫 18

1006

5

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

松家祕傳玉の鍵





と云ふは義の類茶話の口授本詳に記し  
平三三のつかりに授ふべく

之録中一書 柳集二月吉辰

此川少人 芭蕉庵

表紙



美の字より所を是は古の所なりと服は  
さかきと別つ所なりと 柳集  
のさかきと別つ所なりと 柳集  
と云ふは服は初に字眼を定むる所なり  
柳集の字眼を定むるの自はと別つ所  
なりと 柳集の字眼を定むるの自はと別  
つ所なりと 柳集の字眼を定むるの自は  
と別つ所なりと 柳集の字眼を定むるの  
自はと別つ所なりと 柳集の字眼を定む  
るの自はと別つ所なりと 柳集の字眼を  
定むるの自はと別つ所なりと 柳集の字  
眼を定むるの自はと別つ所なりと 柳集  
の字眼を定むるの自はと別つ所なりと

漢のときハ入類の上ヨリ差別ナシ  
 の位服をウケ外ニ七つの位とあるが服ハ月  
 一ノ指と云ふハ行ノ位とあるヲ  
 廿五條  
 昔々客位服と云  
 るの位の事義字字字ナクともなり  
 何と云ふ

一  
服  
の  
ア  
キ  
イ

ちうくしてさきへて  
 農の田植を  
 心あつたのしる  
 破のさしはれ  
 ぬ

月夜行

故のちをるゝねの心

素心亭記

孝の陽文

字眼之確切

老子の心

中々下と静に

名字能くはるるも又服御の字からいふ  
に古式に多振を偏くしてゐる  
お針を縫所の字を之より従ふは五服の  
字よりお針を縫所の字より

お針を縫所の字より

お針を縫所の字より  
お針を縫所の字より  
お針を縫所の字より

お針を縫所の字より

お針を縫所の字より

お針を縫所の字より

お針を縫所の字より

お針を縫所の字より

お針を縫所の字より

お針を縫所の字より

お針

空の底に〜まの縁

空の水鏡の〜は川

美〜てまを海<sup>ウミ</sup>の心<sup>ココロ</sup>

静の心と〜雲の袖

<sup>心附</sup>時〜ぬ心のち〜

白のまのち〜

白く神と十の心ある角こ

道

空のち〜まのち〜

人の心と鏡磨く〜

心

ち〜心と鏡磨く〜

心と鏡磨く〜

心と鏡磨く〜

心と鏡磨く〜

心と鏡磨く〜

心と鏡磨く〜

以る

市中いもの白き月

是くつとけり

高野の十丈に一の月をくく一宿の白に  
高野の白にけりけりけりけりけりけりけり

高野の白にけりけりけりけりけりけり

高野の白にけりけりけりけりけりけり

高野の白にけりけりけりけりけりけり

高野の白にけりけりけりけりけりけり

高野の白にけりけりけりけりけりけり

高野の白にけりけりけりけりけりけり

高野の白にけりけりけりけりけりけり

高野の白にけりけりけりけりけりけり

高野の白にけりけりけりけりけりけり

高野の白にけりけりけりけりけりけり

高野の白にけりけりけりけりけりけり

式口服と文字とを爲しあはれに禮  
とて爲る草なれにサレたれのはも人の様  
抄しゆにうきを

### 去秋のうき

秋の四つとて去る四に月をせつとて人  
秋と云ふものは去るのうきとて戒む  
後とて秋とて去るのうきとて戒む  
秋とて一とて秋とて二とて月の名を

去る秋とて去るのうきとて戒む  
秋とて一とて秋とて二とて月の名を  
秋とて一とて秋とて二とて月の名を  
秋とて一とて秋とて二とて月の名を  
秋とて一とて秋とて二とて月の名を

又秋のうきとて去るのうきとて戒む  
秋とて一とて秋とて二とて月の名を  
秋とて一とて秋とて二とて月の名を  
秋とて一とて秋とて二とて月の名を  
秋とて一とて秋とて二とて月の名を

[illegible]

又曰或謂之先王と成祖と成へるゆゑを以てま  
うたふ所へ上る求むる故にききとの  
謂ふは空しくなりとて皆をたふさんとて

子思子

御譜字之  
イハ修月

[illegible]



何事かかん

南のりやうはくまはくま

花菰馬のりやうはくま

檜檜山の神もよのまはくま

いそふ山田のちりしはくま

坪もよのまはくま

是れはくまのりやうはくま

新物をもてあはくまはくま

るなをくまはくま

あさのあはくま

服もくまはくま

あはくまはくま

あはくまはくま

あはくまはくま

合まはくまはくま

あはくまはくま

山もあはくまはくま

とるをそまきし中七郎様もまきに  
まゝ深山の杉いふ所より中よりまき形  
害くまはふ山をみ形りしとていふこと

山陣祈禱の史記

法宗より海新白丁成道にまかりし國  
為ふ所は能き空恵に條而般に色まき  
法宗より長頸虎まき他世に秘傳しん  
紹巴 自らみれふまきお供

お新々上の軍まきし川

源新新

名新川より他の川こゝ又人閑き吉に新新  
征伐お供の時

お新々いふて新々新々いふて

まき腰通るなりしとて法軍通るつゝ  
しん新々よりしん新々又とて通るなりし

お新々今日より新々五月新

新々新々新々

そい思ひの心なりしとて通るなりしとて新々

なまぬは けふもあまこゝろ だく 誠意いへ ちよの  
未だぬれい 初め だまを

海 しくも 相違ふ ねの あまの ね

兼山

とくは 神主 采女 出陣の時 じき 笠を 通も 運落  
もや 鬼廻のふし

鳴り けて 勝と 見る せよ 山様

長崎九段の所宗

山 ぬれ の もろき なまこゝろ

あ 破紙 の 書も 多く 新橋 へ くれと とも ぬ の ころ

胸の 服り けな ぶる ぬ 軍 ぎん へ けし

そ 切と ころ

衣 けし けし けし けし けし けし けし けし

衣 けし けし けし けし けし けし けし けし

人 けし 散る けし けし けし けし けし けし けし

き けし けし けし けし けし けし けし けし

胸 けし けし けし

中 けし けし けし けし けし けし けし けし

月とともてあき除に準之

奉伺法樂（事）

その他は神佛一對にてあるものなり  
も樂をすも法を莊嚴する人なり  
神樂仙樂ともいふ

一梵語五音は初め初ニある通。初四ある通。初五ある通。

初め諫言の事

五七五終句に常あり。心ニ調ニ又字の字  
あり。初め又ニ一。初め又ニ初めの初めと常の中  
に常あり。終句にも調あり。初めにも  
常あり。野山峰の根あり。（合）  
終句にあり。初めにもあり。

その他は徳の中の格とあるものなり  
もあきなり。九能あり。初めの初めニある通。



之句 惠五句 ちね 交つ 是 多く い 年 勝之 表に  
 帝出の 所と ころ づ 説を せ 是 来る 乙



[illegible]

さうりや海のへん 物をも  
此のうへに なるゝ

[illegible]

虚あるものこそ世の務りとしてこそ虚に實ある  
 田の序の虚を<sup>ヲカサニ</sup>タラしむるも其虚に実あるに  
 起る者へ通るに實をさし人へつねとれば  
 こそこそ柳の虚として柳の實をこそ柳の  
 こそ人とこそ人こそこそこそこそこそこそこそ  
 こそこそ一心の心こそこそこそこそこそこそ  
 此の心の虚を以て人こそこそこそこそこそ  
 虚に實の心授の人こそこそこそこそこそ  
 おの虚とこそおの虚とこそこそこそこそ人

のそく、唐人の山人、世に名を著す

出齊曰、修家、和の切字、極事、白ま和、有出、  
修、切字、之理、終、和、極、切字、者、切、之、義、也、切字  
之、要、之、修、名、出、之、和、可、出、也、和、音、出、之、和、  
要、之、修、名、自、現、然、之、恨、之、雜、大、理、是、之、の、深  
旨、也

明新曰、和、之、秘、藏、修、名、之、呼、曰、切字、切、要、之、  
故、餘、志、望、之、理、也、之、理、之、和、新、要、之、修、名

出、之、和、可、出、之、和、可、出、之、和、要、修、名、  
自、現、恨、人、之、雜、大、理、之、和、何、法、何、修、名、  
和、可、出、之、和、可、出、之、和、切字、之、和、之、理、也、

五、切、の、理、の、之、理、也、之、理、也、  
之、理、也、之、理、也、之、理、也、

修、之、和、可、出、之、和、可、出、之、和、  
之、理、也、之、理、也、之、理、也、  
修、之、和、可、出、之、和、可、出、之、和、  
之、理、也、之、理、也、之、理、也、

如巴法眼曰 自同自意

二修身の修も 如巴の如字にさしてははる  
それよとてさうし ちやうど ちやうど 東野  
と野字 如巴の如字にさしてははる  
神神秘も 出舞も ちやうど ちやうど  
か(理)とさうしてははる ちやうど ちやうど  
如巴の如字にさしてははる ちやうど ちやうど  
ちやうど ちやうど ちやうど ちやうど ちやうど

やう ちやうど ちやうど ちやうど ちやうど  
はたの字にさしてははる ちやうど ちやうど ちやうど ちやうど

ひあに知けりしは ちやうど ちやうど ちやうど ちやうど  
今もちやうど ちやうど ちやうど ちやうど ちやうど  
ひあに知けりしは ちやうど ちやうど ちやうど ちやうど  
ちやうど ちやうど ちやうど ちやうど ちやうど

如巴の如字に  
ちやうど ちやうど ちやうど ちやうど ちやうど





[illegible]

幸ひにやとあるはふく西津島岡  
 行方切字事あるはふく西津島岡  
 幸ひにやとあるはふく西津島岡  
 幸ひにやとあるはふく西津島岡  
 幸ひにやとあるはふく西津島岡

句の形、よく知せしに校書してゐるが  
 えぬお多—きといふは心持—ぬ世のうらさ  
 因行よ昔年の切字なき—申考へ玉津嶋  
 に思ひまじりて—と云へれりと云  
 有難き心させし物老の如く春の日に残る  
 おもくやう娘のかやうゆをいふると歎息し  
 けし心のゆかり—つたれの由玉津島に  
 いそぐとては—いそぐ歎息の何ぞそのこに  
 あつた情を寄くとて—言叶了涙をも皆地に

初め

高に居る松の風

高に居る松の風

高に居る松の風

高に居る松の風

高に居る松の風

高に居る松の風

高に居る松の風

高に居る松の風

高に居る松の風

高に居る松の風

高に居る松の風

高に居る松の風

高に居る松の風

高に居る松の風

高に居る松の風

はがしそにのちからなほしつゝあふく  
て中に情をいふはくは休つゝあふく  
ふれ

秋風の吹くもさへ白き

菅家

花乃あふえ浪のさへ

伽倻の句よ

松の葉の轉るるは海斗

ふはるは句のや切な

海さへはくちく人つゝあふ

庭さへそつゝあふ

あふくまの山の里の海さへはくちく人つゝあふ  
あふくまの山の里の海さへはくちく人つゝあふ  
あふくまの山の里の海さへはくちく人つゝあふ  
あふくまの山の里の海さへはくちく人つゝあふ  
あふくまの山の里の海さへはくちく人つゝあふ  
あふくまの山の里の海さへはくちく人つゝあふ  
あふくまの山の里の海さへはくちく人つゝあふ  
あふくまの山の里の海さへはくちく人つゝあふ  
あふくまの山の里の海さへはくちく人つゝあふ  
あふくまの山の里の海さへはくちく人つゝあふ

伽倻の句に

酒香いそはくちく人つゝあふ





鬼神もも感せ——人をも悦ば——  
初も——きり——秘心あり人秘古  
秘——てい傳も——母を面白く心樂に  
と——べし——とまて人個のて目とと  
とあり——

古御證う御心を感て秘奥へ傳は  
徳に人見代て皆う悦ぶ也

寛保元年極月旬

杉風 左判  
宗瑞 左判





